

脱原発世界会議2012@YOKOHAMA セッション報告書

- 企画タイトル B-1「世界のヒバクシャから学ぶ」
- 日時 2012年1月14日(土) 15:00-16:45
- 場所 3Fホール(301+302)
- 企画参加人数 約600名
- 企画団体ピースボート
- 文責 大竹更(ピースボート)
- 登壇者
 - ・ 田部知江子／原爆症認定集団訴訟弁護団、弁護士(日本) ※司会
 - ・ アントン・ヴドヴィチェンコ／NGOラジミチ・チェルノブイリの子どもたち(ロシア)
 - ・ アバッカ・アンジャン・マディソン／前国会議員(ロンゲラップ選出)(マーシャル諸島)
 - ・ ローラン・オルダム／「モルロアと私たち」会長(タヒチ(仏領ポリネシア))
 - ・ ピーター・ワッツ／オーストラリア非核連合共同代表(オーストラリア)
 - ・ アンドレアス・ニデッカー／核戦争防止国際医師会議、放射線学者(スイス)

・企画の中で発表され話し合われたこと

この企画では、核時代の中で、核の連鎖のあらゆる段階でヒバクシャが生み出されてきたという事実を理解し、また世界のヒバクシャたちから放射能の被害(長期的影響や社会的影響)についての理解を深めることを目的とし、チェルノブイリ原発事故、太平洋における核実験、オーストラリアウラン採掘、そして広島・長崎のヒバクシャの事例に登壇者に語っていただいた。また、放射線被害を科学的根拠から説明していただき、なぜ原子力エネルギーに異論を唱えるべきか再認識した。

まず始めに、原発事故で大規模な被害を周辺地域にもたらしたチェルノブイリ原発事故の被害の実態をアントン・ヴドヴィチェンコ氏に報告していただいた。福島視察ツアーに参加したヴドヴィチェンコ氏は、汚染された福島の町から誰もいなくなり、空っぽの家々が並ぶ光景がチェルノブイリ周辺地域と似通っていると表現した。また、事故による周辺住民への社会的問題や健康的被害も説明。福島原発事故を受けて、停止予定だったロシア政府によるチェルノブイリ事故の補償金支払いが継続されるようになったことにも触れ、世界の人々がともに協力して、核のない世界を築いていくことが大事だとメッセージを発信した。

太平洋における核実験の舞台となったマーシャル諸島出身のアバッカ・アンジャン・マディソン氏は、米国によるビキニ環礁など太平洋地域で1946年から1958年の間67回に渡って行われた核実験による被害の実態や補償に関することを自らの叔父や家族の経験を元に報告した。核実験によって健康被害を受けた島民たちが、何も知らされず米国による核実験の人的被害調査の実験台となったことや、汚染地域に住む島民に対して2010年以降継続されなくなった補償に関する問題、そして政府の対応に怒りを感じる住民たちの姿を、自ら視察した福島のケースと照らし合わせて説明した。未だに自らもこの実態の解決策を模索しており、互いのケースから学び、解決に向けて共に協力していきたいと意欲的に語った。

同じく、太平洋においてフランスの核実験の舞台となった仏領ポリネシアのタヒチ出身であるローラン・オルダム氏は、核実験は人間に対する人間によった意図的な犯罪であり、太平洋の人々の人権を踏みにじったと批判した。また、加害者(実験国)の政府は、実験の補償に関する法律を自らが制定していることを「加害者自身が、

犯した罪に自ら判決を出している」と例え、民主国家と名乗る国が被害者の意見を反映させていないことを強く批判した。フランス政府が「国家防衛のため」と核実験の被害を被害者に対して隠蔽している事実や、メディア操作、不十分な被害者補償に関して、福島の実況と似通っていることを指摘し、福島の人々は勇気を持って自らが問題に対して動いていくことが重要と述べた。

世界のウラン資源の3分の1を保有するオーストラリア出身で、自らの国から世界へ核の源が輸出されていることを申し訳なく思っていると主張したのは、ピーター・ワッツ氏。自らの家族がオーストラリアにおける核実験で被曝し、家族の中には不妊症に悩んだり、幼くして亡くなった弟が政府による核の人体への被害を調査する実験台になったことを吐露するほか、ウラン採掘によって昔から先住民が住む聖なる土地が汚されていることをはじめ、核の被害を伝えた。核の連鎖による被害を阻止するためにも、世界の3分の1のウラン資源を保有するオーストラリアのウラン採掘を止めることが重要と述べ、世界の人々が共に立ち上がれば核の連鎖を断ち切ることができるかと主張した。

世界のヒバクシャの実例を受けて、広島・長崎の原爆症認定集団訴訟弁護団を務めてきた田部知江子氏は、広島・長崎のヒバクシャたちによる原爆症認定訴訟のたたかいを明かにした。田部氏は、今までの自らの弁護団の経験に基づき、政府は原爆による放射線被害を過小評価していると述べた。原爆症認定にあたり、直接被曝は評価されるものの、内部被曝に関しては評価されず、また被曝の状況を形式的な方法でしか判断しない原爆症認定制度の問題点を指摘した。ヒバクシャたちが立ち上がり、そして周囲の人々がそれを支援していくことが重要だとメッセージを発信した。

これらの報告を受けて、最後に放射線学者であるアンドレアス・ニデッカー氏が科学的根拠に基づいた放射能の被害を分析し、なぜ原子力開発に異論を唱えるのかを説明した。ニデッカー氏は、放射能による健康被害や汚染の恐怖を科学的な調査結果に基づき説明し、低レベル放射線による新たな健康的被害も報告した。また原子力エネルギーの7つの欠陥（コスト、安全性、廃棄物、水、放射能、資源、核拡散）を述べ、人々は同エネルギーのマイナス面を理解し、原子力発電に反対する必要があると述べた。

最後のパネルディスカッションでは、今後もっとヒバクシャの声を聞き入れ、加害者でなくヒバクシャたちが判決を下せるような法廷があるべき、という意見や、ヒバクシャたちが自らの体験を皆と共有し、核の危険性や恐ろしさを伝えていくこと、そして今日この会議で共有されたメッセージを各自が持ち帰り、行動に移すことが重要、などの提案が挙げられた。

・参加者層、どんな意見や反応があったか

参加者は主に中高年世代が多いように見えたが、ちらほらと若い世代の参加者も見られた。時間の関係から、参加者からの意見や質問を受け付けることはできなかったが、セッション中にメモをとるなど、意欲的な参加者が多いように見受けられた。

・当初予定していた目的を達成できたか

当初の企画の目的である、世界のヒバクシャたちから放射能の被害を学び、科学的根拠に基づいた放射能被害を理解し、福島の実態に関連付ける、という観点から見ると、登壇者の力強くて確かな報告によって目標は達成できたと見受けられる。

・今後の行動につながりそうな新しいつながり、発見など

世界のヒバクシャから直接的に各地域の実例をまとめて聞く機会は稀であったため、世界の实態を理解するには良い機会であったと考えられる。登壇者の何名からか提言があったように、当事者たちが自ら行動を起こし、それを周りの人々が支援していくことや、互いの経験を共有し、広めていくことが重要である。

・反省点など

今回は世界のヒバクシャの実態を理解することが目的であったが、もし時間が許せば、各登壇者が自らのケースと福島のケースを比較し、世界、日本、そして特に福島の人々が今後どのような行動に移せばいいのか具体的な

助言をいただけたらさらに充実したセッションになったのかもしれない。



(写真: 高橋真樹)